

# 月影

平成十七年十二月一日（第十一号）

浄土宗西山禅林寺派 常林院

みな人を渡さんと思う心こそ

極楽にゆくしるべなりけれ

（千載集） 永観律師

ぜんりんじ

「禅林寺」と言うとき首をかき上げられることがあるが、「永観堂」えいかんどうと言うと、ほとんどの人が分かるようである。

平安時代の創建から永観堂は「もみじの永観堂」として幾多の人々から親しまれてきた。

今年も秋の訪れとともに大勢の拝観者でにぎわいを見せた。

## みかえり阿弥陀と永観律師

ようかんりっし

なむあみだぶ なむあみだぶ・・・

永保二年（一〇八二）二月十五日。その日も永観は阿弥陀堂で念仏行道をしていた。

夜を徹した行も、もうそろそろ終わりだが、夜明けまでにはまだ少しある。

凍てついた堂内では、時おり蠟燭のほかがが永観の姿を映し出していた。ふと何かの気配。思わず息をのむ。

壇から降りて前を歩かれているのは、ご本尊の阿弥陀如来。

すつと首を左にひねって永観を見られた。

——永観、遅し

禅林寺「永観堂ものがたり」より

永観律師。正式には「ようかんりっし」と呼ぶ。

律師とは国が任命した僧官をあらわす。永観律師は東大寺で修行した俊才で、朝廷からもしばしば招かれるなど、エリートコースに乗って出世。東大寺の別当職につくなど中央で活躍した僧である。だが、「名利を追うは僧の本義にあらず。」として、在職わずか三年で別当職を辞し、称名念仏にのめりこんでいった。「禅林寺」という正式な寺の名前が「永観堂」という名で知られるようになったのも、永観律師が禅林寺の住職をしてからである。

みかえりの阿弥陀さまは永観堂のご本尊である。八十センチ弱の小柄な尊像である。

もともとある老人が寄進した阿弥陀像は、宮中から奈良の東大寺の宝庫に納められていた。それを知った永観律師は、「このよくな阿弥陀像を宝庫にしまっておくのはもったいない。」と嘆いたのを白河法皇の耳に入り、「それなら永観が護持して供養せよ。」と預けられた。

ところが永観律師が、その像を背負って入洛する際に、東大寺の僧が像を取り戻そうと追いかけてきた。宇治の木幡まできたところ、その像が永観律師の背中にしがみついて離れなかったのを追ってはあきらめて引き返したという。そこで白河法皇は、この阿弥陀如来こそ永観有縁の像であるとして、永久にその給仕を命ぜられたといわれている。

毎日、六万遍の念仏を日課としていた永観律師。

永保二年二月十五日の明け方、本尊の阿弥陀仏が壇上より降り、先導するように行道を始めたという。茫然と立ちつくす永観

律師に阿弥陀仏が左にみかえりつつ、「永観、おそし。」と呼びかけた。

永観律師はみかえっておられる尊容を拝し、「奇瑞の相を後世永く留めたまえ」と祈った。この阿弥陀仏が「みかえり阿弥陀如来」である。

永観は天永二年（一一一一）に七十九歳で念仏を申しながら亡くなっている。

永観堂では、この永観律師の靈験を追体験して毎年二月十五日に「みかえり念仏行道会」が執り行われている。



## 浄土宗の各派

永観堂（禅林寺）は浄土宗西山禅林寺派の総本山である。

法然上人が開かれた浄土宗は、法然上人の死後、弟子たちによっていくつかの分派が形成され、現在は大きく分けて次のように分かれている。

西山派（せいざん）・・・西山上人の流れをくむ。本山は、永観堂を総本山とする西山禅林寺派。粟生の光明寺を総本山とする西山浄土宗。新京極六角の誓願寺を総本山とする西山深草派の三つがある。

鎮西派（ちんせい）・・・弁長上人の流れをくむ。知恩院を総本山とする浄土宗。大本山は増上寺（東京都）、金戒光明寺（京都市）、百万遍知恩寺（京都市）、清浄華院（京都市）、善導寺（福岡県）、鎌倉光明寺（神奈川県）の六つ。別格本山は善光寺（長野県）。

今日、一般に浄土宗といえば、鎮西派の浄土宗をさす。鎮西とは北九州の鎮西の土地の名を由来とする。

浄土真宗・・・親鸞上人の流れをくむ。西本願寺を総本山とする本願寺派。東本願寺を総本山とする大谷派。その他、八派がある。

